

# 経済学科

2012

整理番号 No	科目名 Course Name	学期 Term	配当年次・単位 Student Year(s)・Credit(s)	担当教員 Professor
215	経済学演習 (笹倉和幸)	通年	3年以上：4単位	笹倉 和幸 政政・経演・国演

副題  
Subtitle

上級マクロ経済学

授業概要  
Course Description

1年次の「経済学入門A・B」、2年次の「マクロ経済学」で修得した経済学の知識を前提として、マクロ経済学の理論についてさらに歴史的・数学的に研究する。そのため英語力と数学力が重要になる。さらに、マクロ経済学のゼミであるため、政経学部設置科目「マクロ経済学」を履修していることを必要条件とする（未履修の場合は3年次で必ず履修すること）。

具体的には、マクロ経済理論に関する英語を中心とした学術文献の読解、そしてそれに基づく議論がこのゼミの中心である。それらを通して、マクロ経済学のどの部分が正しくて、どの部分がそうでないか（そしてさらには、どうすればそれを克服できるか）、という（大きな）問いに対して自分自身の答えを少しでも見つけてほしい。

なお、このゼミでは（たとえばサブプライム問題や戦後日本の経済発展というような）時事的・実証的内容は直接的な研究対象ではないので十分注意してほしい。

授業の到達目標  
Objectives

マクロ経済学を歴史的・理論的に十分理解し、マクロ経済学の現状に対して自分自身の考えをもてるようになることを目標とする。

授業計画  
Course Schedule

- 第1回：ケインズ『一般理論』
- 第2回：古典派理論とセイの法則
- 第3回：有効需要の原理
- 第4回：消費理論
- 第5回：乗数理論
- 第6回：投資理論
- 第7回：流動性選好説
- 第8回：貨幣数量説
- 第9回：ハロッドの経済動学
- 第10回：ケインズ派の景気循環理論
- 第11回：ヒックスとIS-LMモデル
- 第12回：マネタリズムと合理的期待形成学派
- 第13回：新しいケインズ派経済学
- 第14回：新古典派経済成長理論
- 第15回：フリードマンとケインズ
- 第16回：IS-LMモデルの理論的整合性
- 第17回：短期モデルと長期モデルの統合に向けて
- 第18回：サミュエルソンの新古典派総合
- 第19回：IS-LMモデル、AD-ASモデル、ソロー・モデル
- 第20回：2部門モデル
- 第21回：消費財市場の均衡
- 第22回：投資財市場の均衡
- 第23回：長期の定義
- 第24回：黄金律状態の分析
- 第25回：消費関数論争
- 第26回：トービンのq
- 第27回：MM定理
- 第28回：動学的最適化理論とマクロ経済理論
- 第29回：オイラー方程式と横断性条件
- 第30回：リアル・ビジネス・サイクルの理論

教科書  
Textbook(s)

(1) ケインズ(塩野谷祐一訳)『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社、1995年。

(2) ローマー(堀雅博・岩成博夫・南條隆訳)『上級マクロ経済学』日本評論社、2010

年。

(3) Mankiw, N. Gregory, 2006, "The Macroeconomist as Scientist and Engineer," *Journal of Economic Perspective*, Vol. 20, pp. 29-46.

(4) Lucas, Robert E., Jr., 1972, "Expectations and the Neutrality of Money," *Journal of Economic Theory*, Vol. 4, pp. 103-124.

(5) Dixit, Avinash K., and Joseph E. Stiglitz, 1977, "Monopolistic Competition and Optimum Product Diversity," *American Economic Review*, Vol. 67, pp. 297-308.

(6) Yun, Tack, 1996, "Nominal Price Rigidity, Money Supply Endogeneity, and Business Cycles," *Journal of Monetary Economics*, Vol. 37, pp. 345-370.

[上記輪読予定論文(3)-(6)は変更の可能性がある。]

参考文献  
Reference Book(s)

- (1) 吉川洋『現代マクロ経済学』創文社、2000年。
- (2) スノードン=ヴェイン(岡地勝二訳)『マクロ経済学はどこまで進んだか』東洋経済新報社、2001年。
- (3) A. C. チャン(小田正雄他訳)『動学的最適化の基礎』シーエーピー出版、2006年。
- (4) パロー=サラ-イ-マーティン(大住圭介訳)『内生的経済成長論(第2版)』九州大学出版会、2006年。
- (5) Mankiw, N. Gregory, 1990, "A Quick Refresher Course in Macroeconomics," *Journal of Economic Literature*, Vol. 28, pp. 1645-1660.
- (6) Koopmans, Tjalling C., 1965, "On the Concept of Optimal Economic Growth," in *The Econometric Approach to Development Planning*, Amsterdam: North-Holland, pp. 225-287.

評価方法  
Evaluation

	割合(%) Percent(%)	評価基準 Description
試験 Examination(s)	%	
レポート Report(s)	40 %	3年次はタームペーパー、4年次はゼミ論文の質で評価する。
平常点評価 Class Participation	60 %	全出席が大前提である。そのうえで授業中の発言等を考慮する。
その他 Other	%	

備考  
Note

関連URL  
URLs for References